

20260817_【閑話休題】夏が来れば・・・

夏休みに入っても多くの生徒が登校し、部活動や学習会など、さまざまなことに取り組んでいる姿をみてきました。

朝早くから、「おはようございます」と登校し、活動に取り組んでいる姿はとても気持ちのいいものです。

学校の外でも、さまざまなことにチャレンジし、成長を続けている生徒のみなさんがいるのだろうなと思うと、夏休み明けが楽しみです。

さて、この時期になると、戦争のことを考えずにはられません。そして、父のことをいつもより少しだけ深く考えます。

父は戦争に「行った」人でした。背中に大きな傷を負っており、亡くなった時、その傷のせいで肺が半分なかったことを知りました。

つらいことが多すぎたのでしょう、生前あまり多くを語ってくれませんでした。

それでも、中学生くらいになって、少し物事がわかる年齢になったと思ったのでしょうか、ぽつりぽつりと語ってくれたこともあります。

海軍で船に乗っていたこと。

敵の爆撃を受けて、甲板の破片が背中に突き刺さったこと。

それでも一命を取り留めて、終戦後、軍で配給された食べ物等を食わずにお土産にして故郷に帰ったが、あたり一面焼け野原で、誰もいなくなっていたこと。

天涯孤独になった父が紆余曲折を経て、大阪にたどり着くまでの話、などなど。

そんな話を聞いたたびに、戦争って？平和って？と考えざるを得ませんでした。

そんな父も、そして母も亡くなってからずいぶん経ちましたが、この時期になると、そんな話も含めて、いろいろ思い出します。

とともに、父がつかったであろう経験を、生徒のみなさん、次の世代の子どもや孫がすることがないようにと強く思うのです。

好きな俳優にチャールズ＝チャップリンがいます。

そして、彼の作品のなかに、「殺人狂時代」という作品があります。

あらすじは省略しますが、その作品中で彼が演じる主人公は殺人の罪で裁判にかけられ、死刑を宣告されます。そのラストシーンで主人公は、戦争と比較し、

「One murder makes a villain. Millions a hero. Numbers sanctify.」

(一人を殺せば殺人者だが、百万人を殺せば英雄だ。殺人は数によって神聖化させられる)といえます。

戦争の残酷さとともに、いかに正常な状態でないかを言い表しているのではないのでしょうか。

今、平和に、日常生活ができることに感謝しつつ、今も世界で起きていることに目を向け、正しい判断ができるようにならなければならないと思います。